

要 旨

学級活動では、学級や学校の生活の充実と向上を図るとともに、健全な生活態度を身に付ける自主的、実践的な態度の育成が求められている。本研究では、基本的生活習慣や学習習慣を身に付けさせるために、望ましい生活習慣や正しい行動の体験活動を通して「快」感情を味わわせながら実践への意欲をもたせた。また、学級活動を中心とし、道徳と関連させたプログラム構成の工夫をすることによって「快」感情を高め、よりよい生活への実践力をはぐくんだ。

〈キーワード〉 ①「快」感情 ②プログラム構成 ③実践力

1 研究の目標

基本的生活習慣や学習習慣をはぐくむための指導事項を精選し、児童の実態を考慮して指導事項の重点化を図りながら、学級活動を中心としたプログラムを構成することにより、よりよい生活への実践力を育てる指導の在り方を探る。

2 目標設定の理由

特別活動における学級活動内容（2）は、日常の生活や学習への適応及び健康や安全に関する共通の問題（題材）について話し合い、集団思考を通して自己決定すること、そして、自己指導力を育成することが特質であり「基本的生活習慣の形成」「希望や目標をもって生きる態度の形成」など指導内容が例示されている。多岐にわたる内容であるが、学級活動の時間の中で指導できるのは、月に1～2単位時間程度であり、指導内容の重点化を図るとともに、他の教育活動とも関連を深めて指導の成果を高めていかなければならないと考える。

また、良い習慣は何回も繰り返し実践することで、初めて身に付くものである。一時的に身に付いたように見える生活習慣でも、児童は、自主的に望ましい行動を持続することができにくく、繰り返し努力させるのが難しい。児童の気持ちを無視した押し付けの指導では、良い習慣は身に付かないのである。児童の自発的に行おうとする気持ちの喚起が不可欠と考える。

そこで、本研究では、基本的生活習慣や学習習慣をはぐくむために児童の実態に応じた指導事項の精選と重点化を図り、学級活動を中心としたプログラム構成を工夫することで効果的な指導の在り方を探る。学級活動における体験活動が日常生活の実践に結び付く指導過程の工夫をすることで、よりよい生活を築こうとする実践力を育てることができると考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

望ましい生活習慣を身に付けさせるために、次のような手立てをとれば、よりよい生活を築くための意欲が高まるであろう。

- ・ 学級活動の中で「快」感情を味わわせる場の工夫
- ・ 学級活動を中心とし、道徳と関連させたプログラム構成の工夫

4 研究の内容と方法

- (1) 児童の日常生活における実態調査を行う。
- (2) 基本的生活習慣や学習習慣について文献や資料を基に理論研究を行う。
- (3) 授業の実践（第1学年）を行い、仮説を検証する。

5 研究の実際Ⅰ（実践化への手立て）

(1) 研究の全体構想

ア 「快」感情について

基本的な生活習慣や学習習慣（以下、生活習慣と略す）を身に付けさせるためには、児童の意識の内面化を図り実践意欲をもたせることが必要である。しかし、児童の発達段階を考えると、低学年の児童に、望ましい生活習慣のよさを内面化させるのはなかなか難しい。そこで、望ましい生活習慣を「気持ちいい」と感じさせること、つまり、体験を通して「快」感情を味わわせることが必要であり、更にそれを高めることによって、日常生活への実践力を育てることになるであろうと考えた。

段 階	感情の内容	達成できたと考える児童の言葉
「快」感情 1	実践活動への期待感となり、実践意欲をもたせる基となる感情	<ul style="list-style-type: none"> ・できそうだ。 ・やってみたい。 ・活動や取組が楽しそうだ。
「快」感情 2	楽しさや満足感が主となり、実践意欲を継続させる基となる感情	<ul style="list-style-type: none"> ・自分でできて嬉しいな。 ・だんだん上手になってきた。 ・活動してみると楽しいな。
「快」感情 3	友達や学級を意識し、他の人を思いやることからくる感情	<ul style="list-style-type: none"> ・学級がよくなって嬉しいな。 ・相手が喜んでくれて嬉しいな。

図 1 段階的な「快」感情の高まり

「快」感情の高まりを図1のように、段階的にとらえ、それぞれの段階での「快」感情を十分に味わわせる工夫を行う。まず、望ましい生活習慣の体験活動の中で「快」感情1を味わわせる場を設定する。そこでは「やってみよう」と感じることで、主に実践意欲をもたせるきっかけとなる感情を味わわせる。次に、望ましい生活習慣の実践を通して「快」感情2を味わわせる場を設定する。そこでは、「できた」「楽しい」「心地よい」など、主に望ましい生活習慣を行うことの気持ち良さを味わわせるようにする。これらの感情を味わわせることによって、児童は意欲をもち、繰り返し実践することができるであろうと考える。また、実践活動を継続させる中で、「友達が喜んでくれて嬉しい」という、相手を思いやることからくる感情である「快」感情3へ高まると考えた。

イ 学級活動を中心とし、道徳と関連させたプログラム構成について

「快」感情を味わわせ、段階的に高めていくためには、効果的な場の設定を行う必要がある。そこで、学級活動の題材を中心に、道徳と日常の活動との関連を図ったプログラム構成を考えることにした。図2で示したように、学級活動の事前に道徳の授業を行い、指導内容に関わる望ましい生活習慣の価値を自覚させる場を設定する。学級活動では、望ましい生活習慣の仕方を理解させ、「快」感情と結び付けながら実践への意欲化を図る。さらに、繰り返し実践させる場として日常の活動を関連させ、生活習慣に関する指導プログラムを構成した。

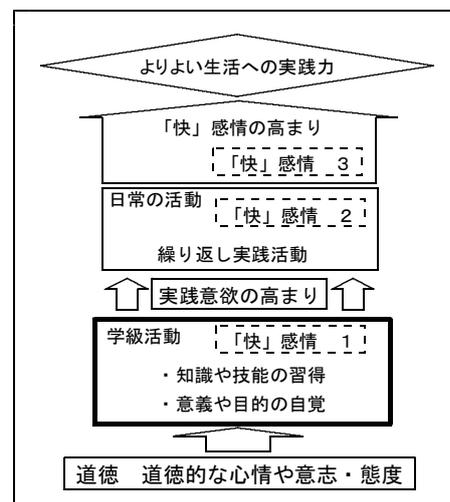


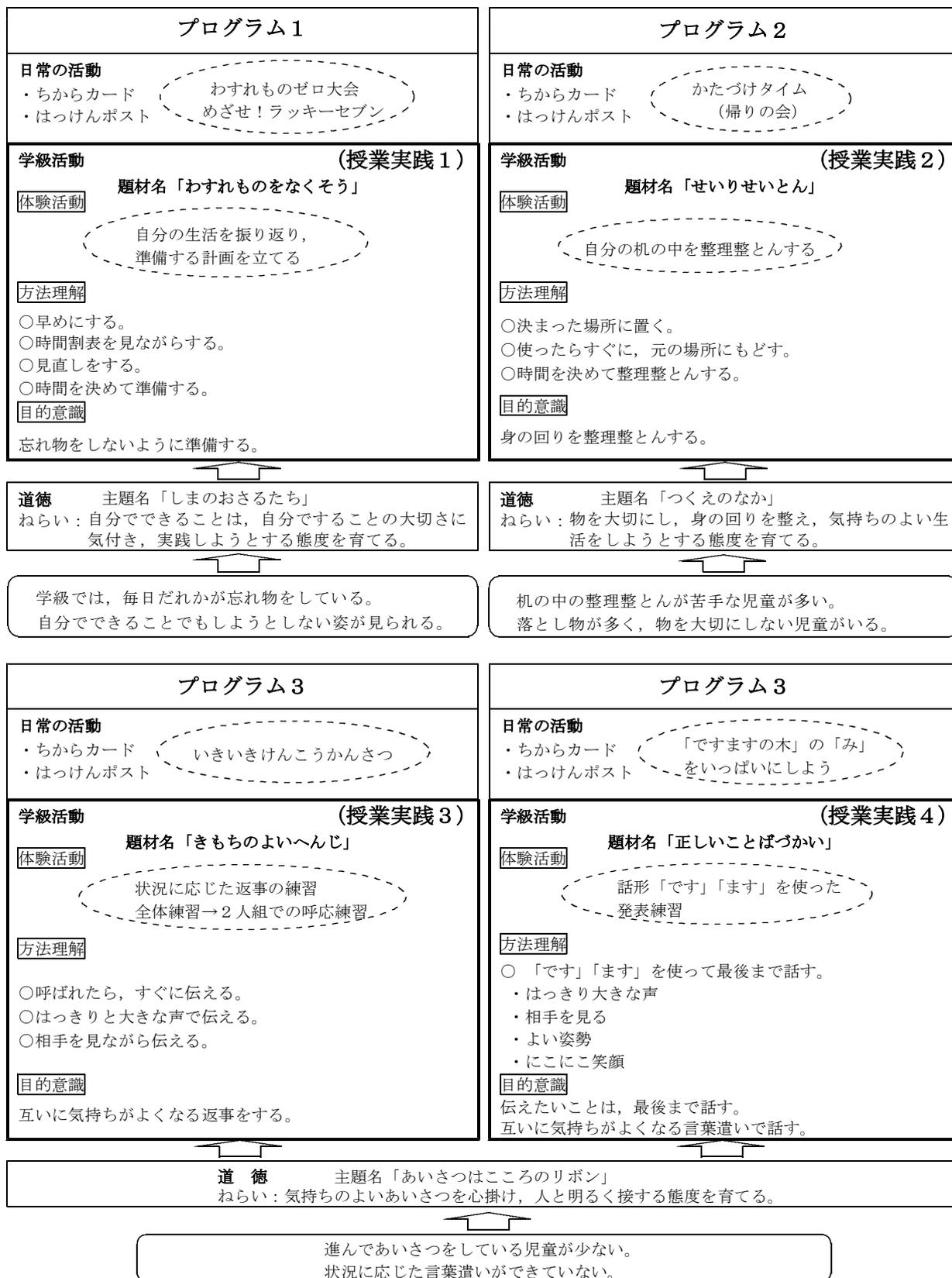
図 2 学級活動を中心とし道徳と関連させたプログラム構成

6 研究の実際Ⅱ（授業を通じた実践的研究）

(1) 学級活動を中心とし、道徳と関連させたプログラム1～3

第1学年において、4つの題材でプログラムを作成し、道徳と学級活動で授業の実践を行った。それぞれのプログラムは、以下の通りである。プログラムにおける日常の活動では、実践への意欲

が継続できるように、振り返りカードである「ちからカード」を使い、児童の実践と、その時の感情を振り返らせながら自己評価させた。また、「はっけんポスト」を設置し、児童が実践の中で、新しい方法を見つけたら「きらきらカード」に、友達のいいところを見つけたら「ほめほめカード」に気付きを書かせた。



(2) 授業実践の結果と考察

ア 学級活動と「快」感情

授業実践2（プログラム2）の題材名「せいりせいとん」では、整とんされた机の中を視覚的教材を使って確かめさせた後、自分の机の中を整とんさせた。授業実践4（プログラム3）の題材名「正しいことばづかい」では、ていねいに話す時の話形を示し、声の大きさや姿勢に気を付けさせながら全体で練習し、一人一人に発表の練習をさせた。このような体験活動の後に、活動を振り返らせる場を設定した。「きもちカードを使って感情を表現させ、「快」感情を明確にするように工夫した。（図3）。

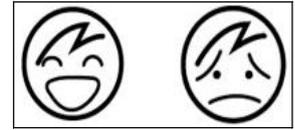


図3 きもちカード

表1や表2の児童の感想には「すっきりしたよ、いつもきれいにするよ」「言い方が分かった、めあてをつかうよ」など望ましい生活習慣を行うことで「快」感情を感じたことがうかがえる。授業実践2では、34名中31名が、授業実践4では、全員が自分で実践へのめあてを決めワークシートに書くことができた。

道徳と関連を図り、望ましい生活習慣の行いと「快」感情をつなぎ、児童に「快」感情1を味わわせる学級活動の場の工夫を行ったことにより実践への意欲を高めることができた。

イ 日常の活動と「快」感情

授業実践2（プログラム2）では、帰りの会の時間に「かたづけタイム」を実施した。児童の「いい気持ち」「みんなとすると楽しいな」などという感想から「快」感情2を味わいながら実践していることが分かる（図4）。整理整とんしたこたことと、その時の気持ちをいつも振り返らせるようにしたので、望ましい生活習慣への意識が深まり、自分の机の中だけでなく、進んで、学級の棚や掃除道具入れなどを整理整とんしている児童が増えてきた。

実践授業4（プログラム3）『『ですますの木』の『み』をふやそう』の取組では、児童が話形を使って話すことができたなら「ですますの木カード」にマークを付けさせるようにした。児童は実践しながらマークを増やしていき「友達として楽しかった」「めあてが使えたよ、嬉しかった」「カードがいっぱいになった」など主に楽しさや自分の生活に生かした満足感である「快」感情2を味わうことができた。「はっけんポスト」を使って、「ほめほめカード」を書いたり、もらったりすることでも実践への

表1 授業実践2の児童の感想とめあて

《「快」感情1》 ・せいりせいとんしたら、すっきりしたよ。 いつもきれいにするよ。 ・そろえたら、きれいになったよ。 ・びよんきちくんにおしえたよ。
(めあて) ・べんきょうがおわったらすぐにする。 ・5ふん休みにする。 ・20ふん休みにする。 ・ひる休みにする。 ・あさきて、きちんとしておく。 ・かえりに、みなおす。

表2 授業実践4の児童の感想とめあて

《「快」感情1》 ・いいかたがわかった。めあてをつかうよ。 ・はっぴょうできて、うれしかった。 ・みんながきいてくれて、うれしかった。
(めあて) ・はっきりいう。 ・大きなこえで正しくいう。 ・あいてをみていう。 ・しせいにきをつける。 ・えがおではっきりいう。

きょうしつがきれいになってうれしいな。
《「快」感情2》 ・せいりせいとんするときれいになったよ。 ・すっきりなってきもちいい。 ・きれいにできたよ。 ・いつもいいきもちになった。 ・みんなでするとたのしいな。

図4 授業実践2の児童の感想

あいてがにこにこになってうれしいな。
《「快」感情2》 ・こんどはしせいもきをつけるよ。 ・「です」「ます」をつかっちはなすと、きもちよかった。 ・「ですますカード」が10まいになったよ。 ・「ほめほめカード」をもらってうれしい。

図5 授業実践4の児童の感想

意欲が高まり、「快」感情も「相手がにこにこしてくれて嬉しい」など友達を思いやることからくる感情に高まっていった（前頁図5）。

「ちからカード」を使って望ましい生活習慣の実践とその時の感情を振り返らせながら取り組ませ、実践については「うまくできたか」ではなく「進んでできたか」について振り返らせた。そのことにより、児童の感想の中には「進んでできたので、『ちから』が大きくなって嬉しい」という記述も見られ、進んでできたことに喜びを感じさせながら実践させることができた。

日常の活動では、自分で決めためあてを生かす実践の場を工夫し、「望ましい生活習慣を行うこと」と「気持ち」を振り返らせたので、「快」感情を高めることができ、繰り返し実践させることができた。

ウ 抽出児の変容

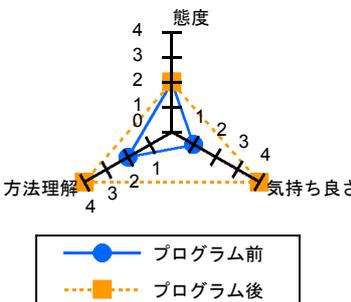
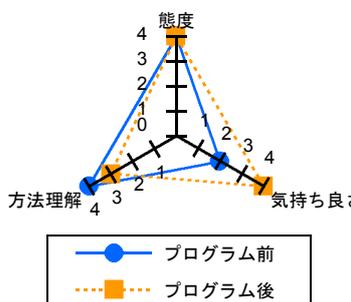
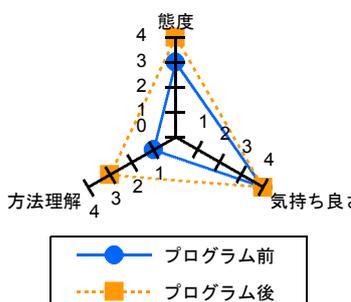
【A児】	【B児】	【C児】
 <p>○ プログラム前 ○ プログラム後</p>	 <p>○ プログラム前 ○ プログラム後</p>	 <p>○ プログラム前 ○ プログラム後</p>
<p>○ 気持ちの良い返事や正しい言葉遣いをしていますか。（態度） ○ 気持ちの良い返事や正しい言葉遣いをすると気持ちいいですか。（気持ち良さ） ○ 気持ちの良い返事のしかたや正しい言葉遣いの話し方をしていますか。（方法理解） 4－はい 3－だいたい 2－少し 1－いいえ</p>		
<p>（学級活動）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ へんじてたのしかった。 ・ はっぴょうがうれしかった。 <p>（めあて） はっぴりいう</p>	<p>（学級活動）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ へんじをしたら、こころがきもちよくて、いきぶんになった。 ・ はっぴょうできてよかった。 <p>（めあて） 大きなこえでいう</p>	<p>（学級活動）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ へんじてよかった。 ・ 「です」とかがんばるよ。 <p>（めあて） あいてをみていう</p>
<p>（日常の活動）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ともだちとしてのしかった。 ・ 「です」「ます」をつかってうれしかった。 	<p>（日常の活動）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ まほうがつかえたよ。うれしかった。 ・ おかあさんからほめられて、とてもうれしかった。 	<p>（日常の活動）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ですますの木がいっぱいになったよ、がんばるよ。 ・ あいさつもがんばっているよ。

図6 抽出児の意識調査とワークシート（プログラム3）の感想

A児は、学級活動の時間に、「きもちカード」を使って自分の生活を振り返りながら、問題意識をもつことができた。練習の場でも、「すぐに」「あいてをみる」「はっぴりと」と具体的な絵カードを示すことによって、2人組での呼応練習を楽しむことができた。そのできた体験が「快」感情となり、自分でめあてを決めることにつながった。また、日常の活動では、朝の健康観察の時、日直に「きもちカード」を持たせ、その時の感情をその場で表現させた。A児は、カードを使うことにより相手の気持ちが分かったり、呼応関係の楽しさを味わったりしながら取り組むことができた。実践を繰り返すことで、プログラムによる学習前より、気持ちの良い返事をする事の「気持ち良さ」を感じ、元気の良い返事をするようになってきた。

B児は、望ましい生活習慣の仕方は知っていたが、なかなか実践につなげることができなかった。実践の中で感情を振り返らせながら、望ましい生活習慣の気持ち良さに気付かせることで、進んで発表する姿が見られるようになった。

C児は、実践への意欲はあるものの、なかなか実践へつなげることができなかった。児童の机に「で

すますの木」のカードを貼り、できた時にいつでもマークを付けることができるようにした。C児は、授業中だけでなく、休み時間にも実践し、マークを増やす姿が見られ、その嬉しさから望ましい生活習慣への実践を継続することができたことがうかがえる(前頁図6)。

児童の「快」感情を高める場を工夫することによって、日常の活動において、進んで実践する姿が見られるようになった。

エ 生活調査からみた児童の変容と考察

定期的実施した「自分の物は自分で片付けるか」についての生活調査では、家庭での片付けの習慣も少しずつ身に付いてきていることがうかがえる。12月に題材名「せいりせいとん」の学習をしたことが生活に生かされ、プログラムが終了した2月も継続しており、ほとんど片付けをしない児童がいなくなっている(図7)。

1月に実践したプログラム3の学習では、気持ちの良い返事や正しい言葉遣いの実践が活発になるにつれて、教室の中でも進んであいさつをする児童が増えてきた。それに伴って、「家の人にあいさつをするか」についての生活調査でも家庭でのあいさつの習慣が身に付いてきていることがうかがえる(図8)。

生活習慣の指導において、指導内容を重点化し、学級活動を中心とし道徳と関連させたプログラム構成の工夫を行い、その中で「快」感情を味わわせる手立てをとった指導の在り方は、児童に望ましい生活習慣を身に付けさせるために、実践力をはぐくむ指導として効果的であったと考える。

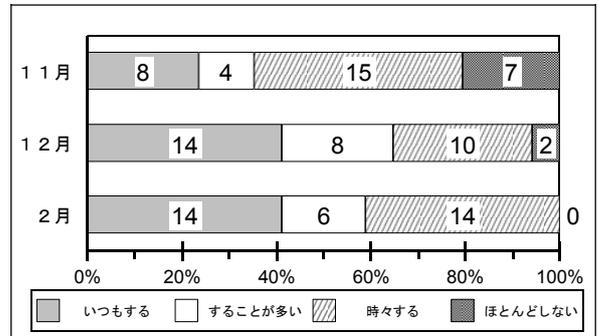


図7 生活調査 (片付けの習慣)

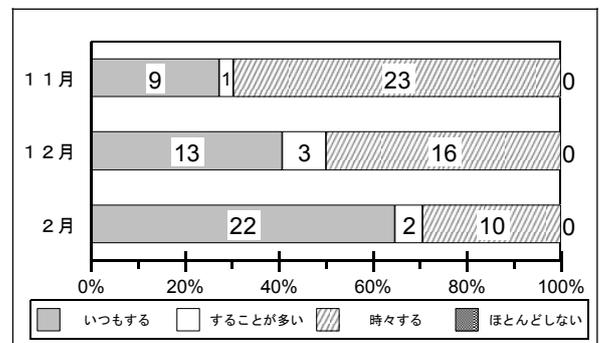


図8 生活調査 (あいさつの習慣)

7 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

ア 学級活動の中で「快」感情を味わわせる場を工夫することにより、望ましい生活習慣を実践する意欲を高めることができた。

イ 学級活動を中心とし道徳と関連させたプログラム構成の工夫をすることにより「快」感情を高めることができ、よりよい生活への実践力をはぐくむ指導に効果的であった。

(2) 今後の課題

ア 望ましい生活習慣のよさと「快」感情を結び付けるためには、学級活動と道徳の関連が必要である。他の生活習慣の内容におけるプログラムを作成し、更に学級活動と道徳の内容項目間の関連を図り、効果的な指導の在り方を探る。

イ 本研究の実践を通して身に付いた態度を継続させ、習慣化させるための指導の手立てを探る。

《参考文献》

- ・ 成田 國英 『家庭との協力を生かす生活習慣の指導』 1988年 明治図書
- ・ 家本 芳郎 『月刊生徒指導』 2004年4月 学事出版